

剣道具



篤史さんが手掛けた胴。胸には波千鳥の刺しゅうがある

ひと針、ひと針、丁寧な手縫いで剣道具を仕立てる。「高崎剣道具」の伝統工芸士、西山篤史さん(36)＝江木町＝は、より上を目指し、鍛錬を続ける。使い手や、技術を作り上げた先人、家族を支えてきた父への思いが、そこにはある。

剣道の防具は面、胴、こて、垂で一組。採寸や型紙起こし、生地のカ断から始め、藍染めの生地、鹿革、牛革などを材料に、それぞれを仕立てていく。量産品ではなく、気の遠くなるような工程を経て作られる防具は、強度がありながら体にフィット。美しさも備える。先人のさまざまな工夫が生きている。

父の啓市さん(67)は、同じく伝統工芸士。1974年に同町に西山剣道具店を構えた。「先人の工夫に、それぞれの工夫を加えて次の世代へ渡したい。国内に技術が残ってほしい」と厳しい姿勢で仕事に向かう。

篤史さんが剣道具職人を志したのは中学1年のとき。剣道の

強化練習で見ず知らずの先生らから、父に作ってもらった防具を褒められた。大勢の中、パッと見て違いが分かる防具。父の仕事のすごさをあらためて知った。

高校3年のとき、同じ道に進みたいと告げた。啓市さんからは「大変だよ」との言葉を掛けられた。啓市さんは当時の心境を「うれしかったのは間違いな

使い心地良く美しい

い。手作業の仕事は、生活が仕事中心にならざるを得ない大変さがある」と振り返る。「剣道は続けるように」とのアドバイスもした。

篤史さんは父の下で針の持ち方、縫い方から学んだ。なぜそう縫うのか理屈を教わると、剣道の経験から、ふに落ちた。

初めて一組仕上げたのは約10年前。父の防具だった。剣道の審査用の一張羅。身に着けた啓

郷土の自然や暮らしの中で育まれてきた伝統工芸品。丹念な手仕事で生み出されたモノたちは確かな技術・技法に裏打ちされ、深い味わいを感じさせる。技を磨き制作する人、そして技を受け継ぐ人たち。市内で工芸品づくりに携わる県ふるさと伝統工芸士やその後継者に思いを聞いた。

伝統工芸

丹念な手仕事 技術受け継ぐ



西山剣道具店で共に手作業に打ち込む篤史さん(左)と啓市さん

市さんは「しっかり作れるようになった」と実感した。うれし

追い求めるのは大変だが、面白さを感じている。「今後、状況も変わると思うが、できれば息子に継いでほしい」とも思う。3世代で作れば幸せだ。

1日から伝統工芸品展

県ふるさと伝統工芸品展(県、県ふるさと伝統工芸士会主催)が6月1日から5日まで、県庁で開かれる。今回紹介した4品を含め、県指定の伝統工芸品32品目が展示されるほか、制作実演もある。時間は10～18時(3、4日は17時まで、5日は15時まで)。県工業振興課(☎027・226・3358)。